

宇野書店をオープン

街の価値向上を目指す

東邦レオは8月1日、東京豊島区の自社ビルに批評家・宇野常寛氏がプロデュースする「宇野書店」をオープンした。グリーンインフラを軸とした居心地の良い街づくり事業の一環として、同社初となる、書店によるオフィスビルの「公共空間化」を通じた価値向上に挑む。

書店の公共的価値

機と捉えた。出発点はあくまでも「オフィスビルの価値と街全体の魅力の向上」のためであり、本の販売利益よりも「書店としての公共的価値」を引き出したい狙いだ。

オフィスビルの価値問い直す

宇野書店が入るのは、JR山手線・大塚駅から徒歩約5分という好立地にある自社ビルの2階部分（150平方メートル／約45坪）。

もともとビル全体を自社で使用していたが、コロナ禍でリモートワークが浸透したためフロアの稼働率が低下。通常であればテナントへ貸し出す発想となるが、同社はこれを新たなオフィスビルの価値創造に向けたアイデア実践の好

もともとビル全体を自社で使用していたが、コロナ禍でリモートワークが浸透したためフロアの稼働率が低下。通常であればテナントへ貸し出す発想となるが、同社はこれを新たなオフィスビルの価値創造に向けたアイデア実践の好



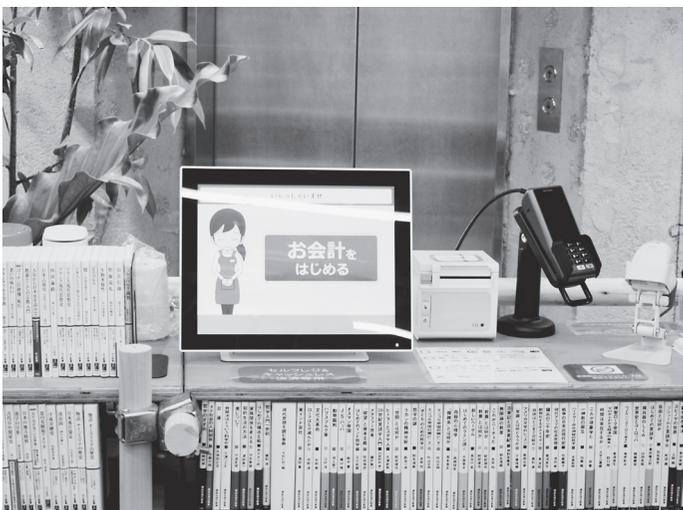
ビルの外観



説明する宇野氏



人工芝が敷かれた床と座ることが出来るスペース



光とコンピュータのセルフレジ

ある」とリアル書店の公共的価値を示したうえで、「これからの社会的役割の相乗効果を説いた。

「フイスの価値は、従業員のクリエイティブリティを刺激するとか、もっと言ってしまうは幸福にする

ニュータイプの書店めざす

ことなのではないか。メンバーシップを確認するために出社するのではなく、本当に仕事をしたい環境だから来る。これだけかしたという開放的なリラックス空間。来店者は入り口で靴を脱いでいくのだという。

扱う書籍は、人文・社会・サブカルチャーを中心に都市開発系を加えた約6000冊。本は青山ブックセンターから仕入れた。すべて宇野氏による選書で、候補本は1万冊にも及んだという。批評家として著名な宇野氏の著書をはじめ、オンラインでは得られない「いつ来ても、知らなかった」面白そうな本に出会える「書店を目指した。また、運営のオペレーションはビルの機能と連携して無人営業を基本とすることでランニングコストを抑え、書店導入の障害を軽くする狙いだ。今後はいくつかのパターンが必要になってくるだろうとしている。

書籍による利益ではなく、書店が放つ公共的価値をオフィスビルに創出させることで心の刺激を感じながら本との偶然の出会いを楽しむことができる。ナチュラルな丸太による本棚やテーブル、ベンチなどといった新たなエリアマネジメントとしての「宇野書店」。アフターコロナ時代に現れた「ニュータイプ」の挑戦に注目したい。

批評家・宇野常寛氏がプロデュース

□所在地：東京都豊島区北大塚 1-15-5 東邦レオ東京支社ビル 2階
□営業時間：平日 10:00～21:00、土日・祝日 12:00～20:00